

慈悲光

Echo No. 172
 令和6年 春彼岸号
 羽村臨濟会 * 一 峰 院 寺
 * * 一 禅 福 林 寺
 * * * 禅 宗 禅 寺

災害に蔓延る嘘情報

はびこ

令和六年元日、石川県能登半島で最大震度七を観測する大地震が発生しました。

元日ということもあり、親族が帰省し家族皆で新年を迎えた日の出来事です。

被災された方達の中には、子どもやお孫さんを亡くされた方も多くいらっしやいました。テレビのニュースの中で、地震

で妻と子どもを亡くした男性が「元日は卑怯ですよ」と答えており、その映像が

今でも脳裏に焼き付いています。

この元日に起こった地震の惨状を目の当たりにし、改めて自然災害は容赦なく、

無慈悲に起こるものだと痛感致しました。

被災された皆さまにおかれましては、この場をお借りし心よりお見舞い申しあげるとともに、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申しあげます。

今回の大地震において私が気になったことは、SNSを使用した「嘘の救助要請・偽情報」です。被災地にいないのに

も関わらず、「生き埋めになっています。助けて下さい」と発信し、その発信を真

に受けた人が善意で警察や消防署へ連絡してしまったり、過去の災害の映像を使

い、今まさに津波が押し寄せているかのような恐怖を煽る偽の情報を流したりと、

このような投稿が多数あったそうです。

熊本の震災時にも、動物園のライオンが脱走したという嘘の情報を流し、そのことが問題となって大きくニュースに取り上げられていました。

SNSは、誰でも利用し発信できてしまうため、利用者自身が発信されている情報が正確では無いことを肝に銘じておかななくてはなりません。また、あやふやな情報を拡散させないことも重要です。

これからも災害は続きます。SNSの匿名性が無くなる限り、これまでのような悪意のある嘘の情報によって、さらに混乱に陥れようとしてくる可能性があるでしょう。

現代の情報過多の時代、私たちには「正しくものを見る目」が今まで以上に必要となってきています。それは自分だけではなく、家族やその他大勢を守ることに繋がっていくのです。

(禅福 尚玄)

禅語に学ぶ

「ごゆるりと

参りましょう」

遠い昔、ある弟子が早く悟りたいが為に、師匠にあれやこれや質問をしました。すると、その師匠は弟子に対し、

「且しゃ 緩かん 々かん」

と、発せられました。

「且」とは「とりあえず・しばらく」の意で、「緩」は「ゆっくり・慌てず」や「落ち着いて」といった意味があります。つまり、この禅語は「まあまあ、慌てずゆっくりと行こうじゃないか」という言葉なのです。

何事もすぐに結果を出したいと思い、気持ちばかりが焦って行動してしまうこ

とがあるかと存じます。ですが、「且緩々」のような「急いては事をし損じる」や「急がば回れ」という諺もあるように、昔から急いで行動することは失敗を生み出すことを、私たちは先人達から伝えられているのです。

現在、効率重視やスピード至上主義と言っても良いほど、より早くことを成すことが最善であるかのような時代になって来ている気が致します。そのせいか、時間に追われているような落ち着かない毎日を過ごされている方もいるのではないのでしょうか。

例えば、花は種を植え、毎日水をあげるにより芽を出し、さらに水をあげるといふ日々を繰り返すことにより花へと成長します。今の現代社会に例えれば、種を植え、水をあげた瞬間に花が出来るような、すぐ花という名の「結果」が出来ることを望まれている社会のような気がしてなりません。ただ単に結果が全てではなく、よりよい結果となるには、

その過程が何よりも大事なのです。

また、移動手段だったり通信手段だったり、技術の進化により時間が大幅に短縮されたものが多々あります。それらが当たり前だと感じるようになると、少しの遅れでもイライラしてしまう「せっかちさん」になりかねません。

「落ち着いて行動する」というのは、誰もが実行したいことではありますが、なかなか現実的には難しいものでもありません。気持ちが焦っている、落ち着きたい、そのような時は「且緩々」という禅語を思い出し、「シャカンカン、シャカンカン、シャカンカン」と心の中でゆっくりと唱えてみて下さい。焦らず、ゆっくりと参りましょう。



(禅福 尚文)

山岡鉄舟 XV

禪と共に歩んだ先人

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきますと思います。

牧ノ原台地の開拓

静岡藩における最大の問題は、無禄移住者として押し寄せた大量の旧幕臣の処遇でした。そこで牧ノ原台地を開拓し、茶の栽培を奨励する事となりました。鉄舟は中心となってその政策を進めていったのです。用地を徳川家からもらい受け、旧幕の精鋭隊士を説得して帰農させたのでした。多くの苦勞を重ねながらも、な

んとか事業は軌道にのり、静岡は今日まで続くお茶の一大生産地となりました。静岡の成功はモデルケースとして全国に広まり、その後のこの国の農業政策に大きな影響を与えたのでした。

明治帝の侍従となる

明治4年(1871) 廃藩置県が新政府より発令されました。それに伴い権令(現代の知事にあたる)と参事(副知事)が政府より各県へ派遣されました。新政府との交渉役を静岡で担ってきた鉄舟にも呼びかけがかり、先ず茨城県へ参事として派遣されました。1ヶ月半つとめた後、今度は伊万里県(現在の佐賀県)へ権令として派遣されました。ここではたった1カ月の勤務で職を辞してしまします。廃藩置県という大変革に対する抵抗勢力の暴発を新政府は危惧しており、それに対する牽制の為に、この制度を軌道にのせる為に鉄舟という人間を見込んでの機用だったのでしよう。

静岡に帰って、再び静岡県政に勤しむ

鉄舟でしたが、そのまま放っておかれるはずも無く、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允らのたつての要望で明治天皇の侍従番長となります。固辞していた鉄舟でしたが、断りきれず10年という期限を設けて出仕を決断しました。静岡を離れ、東京へ戻る事となった訳ですが、鉄舟を慕う多くの人々が別れを惜しみ、鉄舟宅での別れの宴は幾日にも及んだということ

です。
生れ故郷である東京へ戻った鉄舟は、水を得た魚のごとく、その才を發揮していききました。この項の冒頭で鉄舟は剣道、禪、書の達人で全ての事で超一流であったと記しましたが、いよいよそれが完成の域へと達していく事となるのです。この時鉄舟は37歳でした。

以下次号 (一峰 義紹)



禅寺雑記帳

- ◆令和10年に、私たちの大本山、鎌倉建長寺開山、蘭溪道隆禅師の七五〇年の大遠諱法要が厳修されます。宋(中国)から渡来した禅師は達磨大師以来綿々と受け継がれて来た正統の禅を日本に伝え、幕府を通じて日本の武士の精神的な拠り所が禅の「今ここ」になるという大きな役割を果たしました。
- ◆禅師は宋の書家、張即之の書体を学び、これを最初に日本へ伝え、後の本阿弥光悦などに大変な影響を与えました。
- ◆また、油を使う調理法を伝えた事で、日本の食文化の幅も広げました。油で具材を炒めて調理するけんちん汁は「建長汁」から来ているのです。
- ◆しかし海の向こうでモンゴルが宋を滅ぼし、その危険が日本へも及びそうになると、禅師はモンゴルの手先という疑い

をかけられ、今の山梨県へ配流されてしまします。その為、山梨には禅師ゆかりの寺が沢山あるのです。

◆山梨の臨済宗大本山、向嶽寺に、日本最古といわれる鎌倉時代の達磨大師図が伝わっています。達磨の絵は作者が不明ですが、蘭溪道隆禅師が賛をしています。

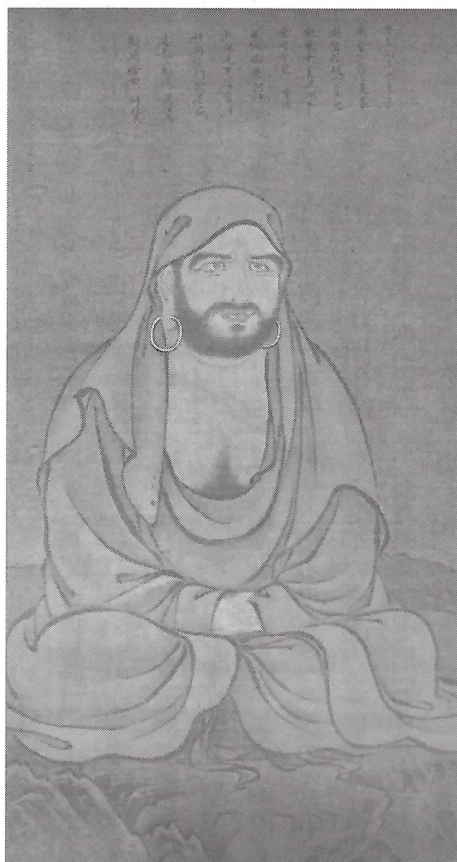
◆向嶽寺は大正15年に火災に遭っています。この時に達磨図は焼失する可能性があります。この時に一人の修行僧が燃え盛る建物に飛び込んで、屋根裏に保管されていたこの達磨図を救ったのです。宗教

学的にも美術学的にも貴重なこの図は、昭和28年に国宝に指定されています。

◆佐賀県出身のこの修行僧は後に縁あって禅林寺の18代住職となります。私の祖父の守山和尚です。

◆祖父の師、向嶽寺の管長でもあった勝部敬学老師は東京大学に創設された坐禅部「陵禅会」でも指導をされ、日本の政財界で活躍する人材を育てました。昭和32年に遷化されましたが、そのお墓を向嶽寺ではなく弟子の寺、禅林寺に建てています

(禅林 恭山)



蘭溪道隆讃 国宝達磨図